回顧：向坂逸郎氏の蔵書について
――向坂ゆき氏に聞く

学生・助手時代の本
ドイツ留学時代
帰国後，九州大学時代
和綴じ本と二つの蔵書印のこと
東京時代
「人民戦線事件」と本の差し入れ
戦後
向坂逸郎の蔵書

聞き手：和氣　誠（W.M.）
和氣文子（W.F.）
早川征一郎（H）
と　き　2001年４月23日（月）
ところ　向坂家（中野区上鷺宮）

――（H）向坂逸郎先生の蔵書が，法政大学大原社会問題研究所に寄贈が決まったのが，1985年７月８日，実際に研究所への搬送が1986年３月でした。2001年３月，『向坂逸郎文庫目録　Ⅴ　原資料』が刊行され，これで寄贈された蔵書についての向坂逸郎文庫目録・全５冊が完成いたしました。そこで，この機会に，向坂逸郎先生の蔵書について，何かエピソードになることをお話しいただきたいということで本日はお願いいたしました。

最も興味あるのは，向坂先生の蔵書が実に膨大で，しかも幅広い分野にわたっているのはなぜだろうかに尽きます。

まずは，東大の学生・助手時代，1923～1925年のドイツ留学前の時代について，お伺いしたいと思いますが。

学生・助手時代の本

向坂ゆき　実は，学生時代・助手時代のものはほとんど残っていないのです。それは，どういうわけかといいますと，ないお金で少しは集めておりましたのですけど，留学のときに，準備や何かで文部省から費用が出ました。その費用を父が借りたんですね。そして，出発までに必ず返すという約束だったのが，返せなくなったものですからね，それで直前になってあわてて自分の持っている本を全部お金に替えちゃったんです。

父は1913（大正２）年，三井物産小樽支店の雑穀係り主任でしたが，北海道のエンドウ豆などの雑穀をイギリスに輸出した際，値段が暴落した責任を会社から負わされるかたちで辞職し，その後

自分であれこれ事業に手を出しては失敗し，ついに向坂留学の文部省からの支度金を用立てざるを得ぬこととなったのです。つまり乏しいお金の中から買い集めた学生・助手時代の本を殆ど全部お金に替えてしまったわけです（東大前の古本屋の番頭「忠ドン」が，この件につき献身的に世話してくれました）。

ただ，留学にあたり，婚約中の私に読んでおくようにと残したのがあります。たしか20冊位だったと思いますが，現在，私の手許にありますのは，つぎの９冊です。

河上肇『貧乏物語』
河上肇『社会問題管見』
河上肇『祖国を顧みて』
ジャック・ロンドン『奈落の人々』（和気律次郎訳）
ジャック・ロンドン『強者の力』（和気律次郎訳）
廣津和郎編『廣津柳浪集』
長塚節『土』
高須梅渓『近松の人々』
ロンブロオゾオ『天才論』（辻潤訳）

そして，そのほかに，私が唯一記憶にあるのは，ジョン・ラスキン『胡麻と百合』（石田憲次・照山正順訳，岩波書店）――これは『向坂逸郎文庫目録　Ⅰ　日本語図書分類順』，『向坂逸郎文庫目録　Ⅱ　日本語図書索引』に載っていますから間違いありません。向坂が何かの必要から私の手許から抜いたのでしょう。現在不明の約10冊は皆抜いたに違いなく，ですから『文庫目録』のどこかに載っているはずです。

それから売らなかった特別の１冊，マルクスの『経済学批判』。これにはわけがあります。それは，1920（大正９）年，東大学生時代，古本屋で見つけてどうしても欲しいのに，どうしてもお金の工面がつかない，ふさぎこんでいるのを見た母が虎の子の金十円也を行李の底から出してくれた。貧乏のドン底で万一の時の為，“おはらいもの”（回収に出す紙くずやボロ切れの類を「くずやさん」が町をまわって買い取っていた）をして貯めたお金，その零細なひそかな貯金の十円，それで手に入れた貴重な本ですから。これは，留学のお供をしたのではなかろうかと私は今思うのですけれど。

――（W.M.）『経済学批判』は，『向坂逸郎文庫目録　Ⅲ　外国語図書』の176頁に４冊載っているんですが，先生が学生の時，本郷の通りの古本屋で買ったのは，時期的にみて，カウツキー編集の第３版（1909年版）でしょうね。

そのほか，売らなかったものには，森戸辰男「クロポトキンの社会思想の研究」が載った東大経済学部の機関誌『経済学研究』第一巻第一号（1920年１月発行）があったのではないでしょうか。この一冊は，先生の生活の門出の記念品ですから――。

向坂　その『経済学研究』は，たしかにありました。この雑誌はたしか発売直後発禁となった貴重品とききました。

それから，売った本の中に漱石全集があったことだけはたしか。というのは，行きつけの東大前の大橋古書店（後出の忠ドンの店）で立派にそろっている全集を見て欲しいけど相変わらずお金が

ない。当時，向坂は三井物産にいた叔父に学費など出してもらっていたのですが，冬服が必要になったからとお金をたのみ，そのお金で買うべく大橋書店に約束した。ところが，お金でなくて冬服を送ってきたので，困って店主に事情を話したら，お金は先でよいからお持ちなさいといってくれたので手に入れることができたということを，結婚後，聞きましたのです。

学生・助手時代に，専門書のほかに文芸書などいろいろ読んだようですから，貧乏学生にしてはそれなりに蔵書はあったのでしょうが，結婚前のことは私はそれ以上には存じません。

――（W.F.）「忠ドン」（高野忠勝さん）のことや大橋書店，『漱石全集』のことなどは，先生の著書『人生は面白い』（社会主義協会出版局・1984年）に，書かれたものが収録されています。それから，先生の子供時代，青春時代については，『流れに抗して』（講談社・1964年，社会主義協会出版局・1978年）などに書かれていますね。

ドイツ留学時代

――（H）つぎに，ドイツ留学時代はどうですか。

向坂　1923（大正12）年１月，ベルリンに行きましたときが第１次世界大戦のあとの大インフレーションで，文部省から１ヵ月分が 300円，マルクに替えてもらいますと，トランクに入りきれないくらいの札なんですって。もう全然お金のことなんか構わずにどんどん欲しいものを買ったらしいんです。

そのときは，何といっても自分の専門を主に集めたんだと思いますけれど，そのほか，もう何でもござれ，欲しいものはみんな買っておりましたのでしょう。

――（W.M.）先生の書かれたもの，――「ドイツ留学時代」，「ドイツ大インフレーションの時代」などを読むと，第一次世界大戦後のドイツ大インフレーション－その政治と経済－もわかりますが，物価は，戦前の1913年に対して，23年１月には2800倍，７月には７万５千倍，９月には２週間で12倍，10月の後半には１週間で14倍あがっているのです。インフレの絶頂ともいうべき12月には，戦前1913年に比べて１兆16億倍という実感のわかない天文学的な倍数になっています。

大インフレーションで日本円が高い。ドイツ人にとっては，たまらない「ヤパーニッシェ・プロフェッソーレン」（日本の教授たち）の“悪行”が，日本の文部省をして，罪ないドイツ留学生一般にたいして給与１ヵ月360円のうちから60円を差し引く措置をとらしたのです。それで先生は文部省から300円もらったんです。

一兆マルク＝50銭だった23年11月15日，ドイツ・レンテン銀行が発行したレンテンマルクによって，荒れ狂ったインフレーションも終息にむかうことになりましたが…。

――（H）ちょうどそのころ，大原社研だと森戸さんがドイツへ行っていたはずですよね。森戸さんの場合は，研究所からお金をもらって持っていったんですよね。向坂先生の場合，では自分の私費で全部買ったわけですね。大変なことですね。

――（W.M.）フランス軍がルール地方に侵入・占領した23年１月11日に先生は，ベルリンに着いているんですね。そして，間もなく森戸先生の紹介で，シュトライザント書店を知るんじゃないですか。

向坂　ええ。シュトライザントですね，古本屋さん。とても親しくなり，お世話になったようで

すね。

――（W.M.）留学時代の書籍の請求書・受領証は，いま大原社研にありますが，『資本論』第一巻の初版（1867年）は，フーゴ・シュトライザント書店から，23年２月５日に20,000マルク，第２版（1872年）は，パウル・ハイデ書店から23年10月17日に41.50ゴールドマルクで購入しています。また，『独仏年誌』第１および第２合併号（1844年）は，フーゴ・シュトライザント書店から，24年５月25日に10ポンド，『経済学批判』初版（1859年）は，プラガー書店で23年12月１日に２ポンド10シリングで入手しています。

そして，ヒルファディング『金融資本論』は，フーゴ・シュトライザント書店から，23年６月８日に84,000マルクで買っているのです。その勘定書に，シュトライザントが，sehr selten（非常に珍しい）と書き足していることから推測して初版本（1910年）らしいのですが，これは帰国後に末弟・正男さんに贈られた。

向坂　ですから，インフレーションが終わると，あとは借金です。

――（W.M.）先生の蔵書で19世紀に出版されたマルクス，エンゲルスの著作，その研究や国際的およびドイツ労働者運動にかかわる文献の大部分は，ドイツ留学の２年半に収集したものですね。ですから，1928年から33年にかけて改造社から編集・刊行した『マルクス・エンゲルス全集』（全27巻30冊，別巻１冊，補巻１冊）は，その当時，入手したものが基礎になっているのではないでしょうか。いちばん苦心したのは，1883年から，はじめは月刊，あとで週刊で40年以上つづいていたドイツ社会民主党の機関紙『ディ・ノイエ・ツァイト』を完全に，その付録（20冊）や総索引にいたるまで揃えることだったようです。それに，「費やした費用も，私のような貧乏学者にとっては，ほんの少しとは言えなかった」と書いておられます。そしてもし，その総索引がなかったら，『マル・エン全集』も出せなかったかもしれない，とおっしゃっていますね。

――（H）ドイツに行かれて買ったのは，どう保管したのですか。

向坂　叔父が三井物産におりましたものですから，ある程度まとまると，三井物産の長崎の倉庫に送ったらしいですよ。それで，そこに保管してもらったんです。それでなきゃ置くところがなかったでしょう。

そんなにインフレーションのときに買い込んでおいた上に，うんと借金して帰ってきたんですから，あきれます。シュトライザントの膨大な借金，当時の日本円にしたら一体いくらになるものか。返金のことを思うたびに私をユウウツにさせていた頃，シュトライザントから九州大学に問い合わせ「向坂は無事か？」。そして結局，向坂も自分も戦争をくぐりぬけたよろこびに，借金は全部棒引き！日本の大小の本屋さんには全く借金なしに死んだ向坂も，シュトライザントには格段の恩恵にあずかったのでした。

つまり，向坂の留学時代（帰国前にパリ，オーストリア，ハンガリア，チェコスロバキア，スイスなどを旅したほかは，殆どベルリンに滞在）は，第一次世界大戦後の大インフレーションと，当時，世界的にも名だたる古書店フーゴ・シュトライザントの格段の好意による多額の借金（請求書明細は大原社研に行っています）と結びついていました。この二つのおかげで，精力的に集めた専門書，資料類，そして学生時代から好きだった文芸一般の書籍や画集など，大原社研へ寄贈した主要部分をなす書籍と共に帰国したのです。

時間にめぐまれた留学中は，専門（主としてマルクシズム）の勉強のほか，余暇には音楽・演劇などを楽しみました。生涯のうちで，これらに最も親しんだ時期であったでしょう。「僕は亡命前のフルトヴェングラー，ワルター，トスカニーニその他名匠のナマをたくさんきいたんダゾ。ペールギュントの舞台のソルベーグの歌はよかったナ。リゴレットがなんとかで椿姫がカントカ」，その他等々は私への自慢です。

しかし，帰国後の多忙を極めた生活の中に残った趣味は，やはり絵画の鑑賞でした（絵も俳句もとても好き，でも自身は一枚も一句も出来ませんでした）。生まれ育った環境からいっても音楽には御縁がなかったようです。でも勿論，音楽に関する興味を示す蔵書はいくらかありましたが。

帰国後，九州大学時代

――（H）1925年５月中旬にドイツから帰られて，６月21日に結婚されたわけですね。それで，九州大学法文学部助教授に任官されたのが，６月30日ですね。九州大学時代は，本の購入はどうでしたか。その頃になると，今度は洋書もそうでしょうが，日本の本も，もう買えるだけは買うといいますか，お金を注ぎ込むという感じですか。

向坂　はい。もっとも，助教授から，翌26年６月，ぽんと教授になりましたけど，お金がなかったことに変わりなく，とにかく私が50円以上はだめと言ったものですから，あとは全部借金（笑）。28年の「３・15事件」で九大からパージされ，辞めて東京に戻った時は，払いきれぬ分を残して福岡から引き上げてきたんです。

福岡では，向坂の実家の方に毎月50円送ったのです。それから，本代が50円で，そうするとあと150～160円。その中から家賃を払って，それから，弟を一人引き取って，中学校へ通わせましてね。それで残ったなかで，何でもかんでもやることにしていました。ですから，もう本当にきゅうきゅうでした。それで，絶対，本代を50円に抑えたのです。

そのときの家賃が35円でした。その家には，とにかく膨大な本が収まったんです。そういうところでなくては越せなかったわけです。その家賃35円というのは，広さの割合にはとても安かったのです。

それというのが，家主は，それこそ当時の福岡の地主で，お金持ちなんです。その方が，ご主人が亡くなられてお子さんもなく，いよいよ自分一人になってしまったときには，大邸宅を整理して，女中さんを一人ぐらい連れてこじんまり暮らそうと思って，ご自分で設計してお建てになった家でした。そこに本がおさまって，しかも家賃が35円でしたから喜んで入ったんですけど，それはもう常識を超える作りの家で，普通の人はとても住めませんね。

――（H）要するに，広かったわけですか。

向坂　はい，本を収納するだけはあったんですから。

――（H）そのころは，やはり本棚ですか。

向坂　ええ，つくらせたんです。特別の本棚を一間の高さで一間幅の，それをいくつか。家具の製造屋がそばにありましたものですから，あらかじめそれをつくらせて，そこへ長崎の三井物産の倉庫にあずけてあった本を運んできて詰めたんですよ。

――（H）家賃が35円で，本代が50円というのは相当な本代ですね，それは。（笑）

話に出た『三兵答古知幾』

向坂　そうですよ。本代と生活費のアンバランス，国立大学教授でこんなのはおそらくなかったでしょうね。

和綴じ本と二つの蔵書印のこと

――（W.M.）話は変わりますが，先生の蔵書には和綴じ本も多いでしょう。例えば，プロシャ人ブラント著・ミュルケン蘭訳の兵書を高野長英が1847（弘化４）年10月か11月初めに訳了した『三兵答古知機』。向坂文庫のは，江戸書林，文苑閣鈴木氏發行，安政３年のものです。こういう和綴じ本も，割合多いですね。

向坂　そういうのは地方の古本屋で買ったものね。和綴じの本を買ってきて，私が受け取った覚えはない。だから，きっと福岡とか大阪にいるとき入手したものでしょうね。そうすると，それはみんな福岡の九大の自分の部屋に置いていたんでしょうから，それが退職後，他の本と一緒に，一どきに来たわけね。それで，私はよく知らないのね。

――（W.M.）石井修三編『歩兵運動規範』２冊，1855（安政２）年，赤松小三郎訳『英国歩兵練法』７冊，1865～67（慶応１～３）年，福沢諭吉編訳『世界図尽』６冊，1869（明治２）年。こんなのが，割に多いです。

和綴じの冊数を数えたことはありませんが，数百冊はありますね。兵学上の大訳業と評された『三兵答古知機』は，出はじめた当時，50両もしたと勝海舟が言っていますね。

向坂　大変なものね，当時の50両というのは。

――（W.M.）高野長英といえば，先生は，1930（昭和５）年に出た『高野長英全集』（４冊，高野長英全集刊行会，非売品）をお持ちだったはずなんですけど，それがないんですね。

向坂　ふしぎですね。どこへ行っちゃったんでしょう。

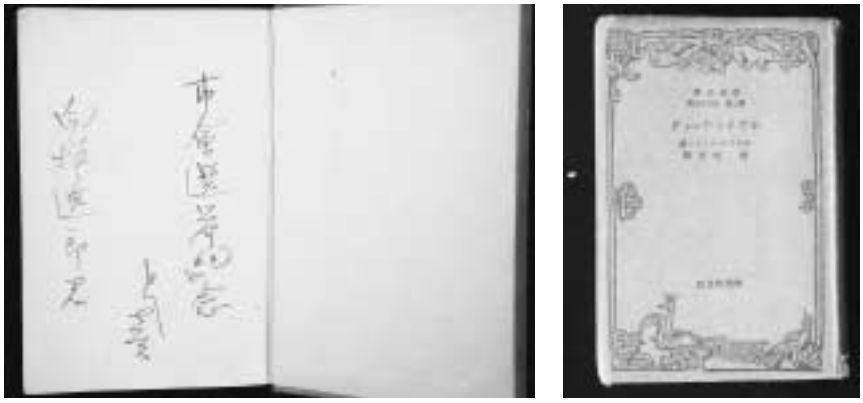
――（W.M.）読まれたという記録はあるんですよ。敗戦直後に出した先生の著書に書いてるから―。

向坂　どなたかに差し上げたんでしょうかね。私も，全然記憶がない。

――（W.M.）その『高野長英全集』を持っていなかったら，『科学の道－高野長英のこと』（生活社，日本叢書66，1946年８月）を書けなかったんですからね。先生が，戦後すぐに出した本ですが。先生と奥さまは戦時中，「科学的」ジャガイモ栽培法の実行で生き抜かれたわけですが，この間に先生は，高野長英が1833（天保４）～36（天保７）年の大飢饉のとき，『救荒二物考』を著わして，日本で最初に馬鈴薯の栽培法を紹介したこと，そのさし絵は渡辺崋山であると知った，と語っておられました。その崋山の馬鈴薯の絵も面白いと言われてましたね。

向坂　それじゃもう，あったに違いないですね。私，全然記憶にない。

――（W.M.）それは，復刻本があとで出ました。全６巻，第一書房，1978～82年刊。これはあるんです。



本はジャック・ロンドン著，堺利彦訳『ホワイト・ファング』（改造文庫，1929年）。1929（昭和４）年２月，東京市会議員選挙に堺利彦が日本大衆党から牛込区で立候補，向坂は，無産階級の代表を持つべきことを強調して，候補者堺とともに牛込公会堂その他で毎日応援演説を行う。このサインは，この時のもの。本表紙（右）と署名部分（左）

向坂　それは大原に行っているのね。和綴じ本も大原へいってるんじゃありませんか。

――（H）全部かどうかは分かりませんが，和綴じ本も多いですね。復刻本の高野長英全集刊行会編『高野長英全集』第１～６巻（第一書房，1978～82年）が大原に来ています。『向坂逸郎文庫目録　Ⅰ　日本語図書分類順』,『向坂逸郎文庫目録　Ⅱ　日本語図書索引』に載っています。

それから，和綴じ本では，話に出た『三兵答古知機』,『歩兵運動規範』,『英国歩兵練法』,『世界図尽』も同目録に載っており，大原に来ています。

軍事ものだけでいえば，浅津富之助訳『英国歩兵錬法』１冊，1865（慶応１）年，大島恭次郎訳『大隊実地演習』１冊，1866（慶応２）年，瓜生三寅訳『英式歩操新書』１冊，出版年不詳，マクドゥガル著／渡辺一郎訳『陸軍士官必携』７冊，1867（慶応３）年，本間寿助著『小隊教錬書　新式』１冊，1867（慶応３）年，陸軍省『軍隊内務書』第１版，１冊，1888（明治21）年などのほか，まだ11点あります。

向坂　この機会に，一寸，申し上げておきたいことがあります。大原に行きました本の中に，「山崎八郎」「向坂正男」と向坂の実弟の蔵書印の捺されたものがあります。どなたも不審に思われるのですが，これは冒頭にお話しした父の借金対策で，長男の逸郎に波及して「差し押さえ」の対象にならぬようにとの工作でありました。父は，その後，秩父セメントに入社し，やっと落ち着きました。

東京時代

――（H）「３・15事件」で 九州大学をパージされ，上京されたのが1928年４月末ですね。上京前から，改造社のマルクス・エンゲルス全集の仕事への協力を要請され，承諾されていたようですが。

向坂　ええ。上京後，マル・エン全集を改造社でやるのをお手伝いというか，主になってやりました。それで，マル・エン全集刊行中は，大学教授でもらっていたときと同じ給料を出しますって。ですから，出費は福岡より少なくて，そして収入は教授並みですから，私としてはとても楽だったんです。

つづいて，改造社が『経済学全集』にかかりましてね。それのマルクス関係のところの担当でしたが，そのあとは，それこそまったくの原稿料暮らしとなりました。

――（W.M.）ところで，先生が，堺利彦さんに接するようになったのは，28年春，九大を追われて東京へ出てからですね。その堺さんが，翌年２月の東京市会議員選挙に牛込区から立候補して，最高点で当選された。先生は，「選挙演説が下手でなるべく逃げたかったのだが，堺さんであってみれば，わがままもいえず，毎日やった。つらかった。しかし，当選された時はうれしかった」と言っていますが，選挙演説は，これが初めて？

向坂　森戸事件で学生のときには生まれてはじめての演説をやりましたが，選挙演説はこれが初めてです。

――（H）ここにある堺利彦署名入りの贈呈本は，その時のものですね（53頁の写真参照）。

向坂　そうです。これは貴重ですね。

――（W.M.）それから，先生の蔵書には，政治・経済だけでなく，哲学，歴史，工業，農業，文学，絵画など広範な分野の本や資料が多いのは，総合的な日本資本主義発達史を書くという志があったからじゃないですかね。

向坂　そうなんですね。その日本資本主義発達史というのは，80歳を過ぎたら，とてもいまのような活動はできないから，そういう歴史のものを静かに書くという希望があった。昭和のはじめ，私の病気療養のための鵠沼で，当時の静かな浜辺を歩きながら語ったことでした。それにはいろいろなものを集めなくちゃならないからって，そういう気持ちもあってその後，専門外のものも集めていたんです。

発達史は，どうしてそんな先でないとだめなのって私が聞きましたらば，いまはとても忙しくて，そういうものを書く時間がないということと，それを書くについては，もっといろいろなものを読まなくては書けないと。その二つの理由で。だから，本はこれからボツボツ集める，そう言っておりました。

だから，いろんな本ですよ。それこそ，浮世絵まで。（80歳をすぎた凡人向坂逸郎の頭脳は，長い年月の休むことなき酷使に，ついに油が切れてしまい，鵠沼海岸の砂をふみつつ，若き妻に語った『日本資本主義発達史』は，その後，買いつづけ，読みつづけた沢山の資料のなかに夢と消えた）。

――（H）そうでしたか。それから，原資料関係は，もう戦前からかなり集めておられたんですね。

向坂　はい。そうですね。

――（H）本は，本屋さんに行けば買えるわけですけど，原資料というのは，大原研究所みたいにちゃんと仕事で集めることで給料をもらっている人たちがいればいいんですけど，おひとりでこれを集めるというのは大変なことだと思うんですよ。どうやって集められたのか，よくわかりませんけども，ビラ，チラシ１枚，パンフレットとかいろいろあるわけですよね。

向坂　運動関係の場面にはよく行きましたでしょう。だから，そういうときにもらってきたビラや何かもいっぱいあると思うんですよね。なんか，そういう資料をまとめてどこかから買ったというようなことはございません，私の記憶にある限りは。

どなたかが持っていて，それをそっくりいただいたということもなかったですから，みんな自分で集めたものです。

――（H）例えばメーデーのチラシなんかは，多分，これはメーデーに行かれたんでしょうね，実際に。

向坂　ええ，メーデーにはもう毎年必ず行っていました。そこで集めたのを持っていたわけですね。

「人民戦線事件」と本の差し入れ

――（H）東京に来られて，それから，1937（昭和12）年12月，「人民戦線事件」ですね。そのときは，本を集めるわけにはいかなかったでしょうけど。

向坂　そのとき買うことはできませんでしたが，本の差し入れということができますからね。警察に留置されていたときは一切だめなんです。ですけど，拘置所ではできました。38（昭和13）年10月１日に巣鴨東京拘置所に移って，そしてもう，10月12日に早速差し入れたのは，『独和大辞典』『大英和辞典』，冨山房の『百科大辞典』，それから『バイブル』。つまり辞書類や宗教書は独房の自分の室におきっぱなしでよかったのですね。

それから，『ドゥーデン』というのはなんですか。私，もう耳慣れている言葉なんですけど，どんなものだったか。なんか辞書のようなものですか。いま手元に当時の手帳がありますが，この印は，自分の部屋（独房）に置いていいもの，『バイブル』と『ドゥーデン』というのと同じ印だから，部屋に置いておけるものですよ，それは。

――（W.M.）その『ドゥーデン』（Düden）は，コンラード・ドゥーデン（1829〜1911）が編集したドイツ語の正書法辞典でしょうね。

向坂　差し入れは，６冊ずつでしたかしら。一冊宅下げすれば，代わりの一冊が入れられる。それが，またいろいろありましたね。それをいちいち書いたら，もうどうにもならないくらいたくさん。『バイブル』のほか，仏教の本もあとから入れたんです。そういう宗教の本と，辞書類は，制限なしでした。

――（W.M.）ともかく，いろんなのを差し入れていますね。いまのお話の監獄へ差し入れた本は，これこれだとまとめておかれたらどうでしょうか。

向坂　もうね，大変なんですよ。

――（W.F.）いずれ何らかのかたちで，記録はしておかれた方がいいですよね。

――（H）それは，どこかにお書きになっているんですか。

――（W.M.）いや，書かれていないのです，いま初めてです。

向坂　この手帳は，当時のものですが，ここに全部，何日にこれこれを入れて，何日にこれこれが宅下げということをきちっと書いてあればいいのにね，そうでないんですよ。ほんの心おぼえとしてのメモ。

――（W.M.）大体どういうものを先生が要求されたかというのは分かるわけですね。

向坂　それは，いろんなものなのよ。だから，書きますとなったら大変よ。そうね，ここに私が書いたものだけは分かりますけど。

――（W.F.）記憶に残っているものだけという限定つきだけど，それでもやはり記録しておかれた方がいいですよ。

向坂　『外来語辞典』，『東京堂月報』，『巌松堂古書目録』，『岩波文庫目録』，こういうのはみんな置いておいていいものの印がついている。だから，交換でなしに入れておけるものはもう，何でもかんでも欲しかったみたいですね。古本屋の目録がいっぱいありますから。よくよく本が好きな人ですよ。

――（W.M.）拘置所ですから，およそマルクス主義の本は入らないでしょうけどね。

向坂　そうです。もうそれだけは入らないんですよ。自分もこういうところでは駄目と考えたとみえて，経済学関係の本というのはほとんどないですね。歴史ものとか，それから文芸ものとか，そういうものですね。

――（W.M.）伝記はありますか。

向坂　伝記も沢山ありますね。ほんとにね，ちゃんと書いておけばこういうとき，分かったのに！　ほんの自分の心覚えでしょう。だから，（記録的に正確なことは）書けないわけです。

――（W.M.）でも，それがあるのとないのと大違いですよ。

向坂　それはそうだけど。これをよく見て，少なくとも宅下げと書いてあるのは必ず読んだものですからね。読まずに返すことはない，欲しいから私が面会に行ったときに希望するので，ですから，それを下げてくるときには，読んでないということはない。

――（W.M.）先生がその本を指示，この次はこれを持ってきてくれというときに，お宅で探されましたか。

向坂　ええ，探したこともありますが，あとでお話ししますが，当時，私は実家におりましたので，弟正男に私の所まで届けてもらったこともよくありました。要するに，獄中で読んだものは，自然科学（主に動植物），哲学，地理，歴史，伝記類，短歌・俳句・小説などを含む文芸書一般と，独房の中でよくも次々に浮かぶものと感心しました。

――（H）古本屋のカタログ，目録も差し入れしたわけですね。買うことは出来なくても，古本屋のカタログってやはり眺めたいんですかね。

向坂　ええ，眺めて楽しいんでしょう（笑）。とにかく，何にも収入がないですからね。それでも，差し入れに５円とか10円とか入れているんです。それは，拘置所に移ってから，面会に行くのに家よりはるかに便利な点やその他の事情から，私の上落合の実家に生活を移しましたが，その間，母は毎月小遣いといって25円くれましたし，他にもお見舞いなど僅かな収入がありました。

――（W.M.）そのときの差し入れた物の記録があるのでしょう。何と何とを差し入れたと。それも，おもしろいですよ。蔵書とは，ちょっと関係ないですけど。

向坂　拘置所の売店を通じて入れたものですね。こんなものしょうがないけど。

――（W.M.）いや，おもしろいですよ。“こんなもの”じゃないですよ，それは。（笑）

向坂　ここからはお金。お金はちゃんと，拘置所の受領書がありますから変なふうになっていないんですが，20円入れたとか，５円入れたとかね。これはもう間違いないんですけど，この品物のほうは売店の受け取りで私が買うと書かれたもの，もうしょっちゅう私，羊羹を入れたのですが，もっと安いもので，あいだをちょろまかすんですよ，あの売店で。

――（W.M.）実際に，入ったものは？

向坂　安物のおせんべいでした（笑）。羊羹や甘納豆が，安物のおせんべいに変わっちゃう。

――（W.M.）家の庭に植わっているボケは，その時のものとか…。

向坂　私の父方の叔父が，見舞いに梅の鉢を入れてくれたんですよ。それで聞いてみましたら，梅なんかは来なかった，ボケが来たと（笑）。それで，そのボケを，帰宅してから庭に移しまして，1952（昭和27）年５月，またこっちへ越すときに記念の木だからって大切に移しました。それが，今は大きな木になって，春が来るたびに真っ赤な花を沢山つけます。贈られた主は亡くなって久しいけれど。

『資本論』翻訳完成をめぐる向坂逸郎とゆき夫人の往復書簡

戦　後

――（H）それでは，戦後の話でよろしいでしょうか。敗戦で，1945（昭和20）年12月21日に九州大学復学が教授会で決まりとなって，それで九大に戻られて，それからまもなく岩波の『資本論』の翻訳を始めるわけですね。

向坂　ですが，『資本論』の翻訳も多忙を極める東京ではとてもやっていられませんのでね。松本の温泉に，１週間とまとまった日ができますと，そこへ行きました。

――（H）何かで読んだことがありますよ。その松本の温泉で，あんまりお風呂に入りすぎて，倒れられたと。

向坂　そうそう。戦後，まだ栄養が十分でない上に，ずっと仕事をしていて運動が不足だと思ってお風呂に一日に何度も入ったんです。で，栄養不足とお風呂に入りすぎたのとで，ひっくり返ったんです。貧血の発作ということでした。

――（H）九州大学に戻られて，国立の先生ですから，これは収入はもうちゃんとありますしね，またお集めになるわけですね。しかも，活動の舞台がたくさんできますから，そこからもらう資料も多かったでしょうね。

向坂　そうです。ただ，九大からのいわゆる賃金，給料は，私の手もとには一切こなかったんです。私の方は，印税と原稿料でやること，自分の給料は，つまり福岡と大阪を中心の活動にすっかり使うということでした。福岡は下宿しておりましたからね。そういうのをもちろん払わなくちゃならないし。

――（H）しかし，印税と原稿料で生活できたんですね。

向坂　だから，東京で生活している方は苦しかったんです（笑）。それはもう，ケチと言われても，やっとやったわけです。

――（W.M.）しかし，とにかく，よく原稿もお書きになっておられますね。

向坂　そうです。ですから，雑誌なんかで派手な広告が出るでしょう。だから，みんなお金がいくらでもあるんだなんて思うらしいんです。ところが，とんでもない。でも，とにかくみんなで，こっちで大家族が食べていたんですからね。それだけの収入はあったわけです。

――（H）九州大でもらった給料は，もうほとんど本代と自分の生活費ですか。

向坂　動くときの交通費や活動費，それから，下宿しておりました家賃ですね。相当立派な家でしたからね。

――（W.M.）私が向坂先生に直接お会いするのは，昭和30年ですけれども，そのときに，高松へ講演に見えました。先生は労働組合・香川県評などの講演料を受け取られなかった。科学や哲学や芸術が，金銭に換算される。なんか，お布施をもらうようで…。でも，弟子たちに「僕のまねをしなくていい」とはおっしゃっていましたね。

向坂　そうですね。もう，それが運動だと思っていましたからね。確かに，いただいたという記憶はありませんね，私には。

――（W.F.）いただけば大体，そういう講座の世話をやいた活動家の人たちにごちそうして，みんな散財するっていう風でしたね。

向坂　だから，皆さん，うちはよっぽどゆったりしていると思っていらしたんじゃないかと。ごちそうをするというよりもね，そういう機会にみんなと話しするという，交流するという，それが主でしょうね。運動で飯が食えるというのは，考えられなかったんでしょうね。

――（W.F.）先生の本代は，東京の家計の方から出ていたんですか，先生のポケットから出ていたんですか。

向坂　本代，福岡で買った古本など現金のものは勿論向こうで出すわよね。

――（W.F.）東京の書店で注文して，あとから請求が来るようなものは…。

向坂　つまり取りつけの東京への本やさんのでしょ。それはやはり本屋さんに毎月きっちりとは払えなかったわね。でも，結局は全部きれいに払いましたけどね。引っ越しのときに清算して払わないとね。本屋さんは，普通の小売商店ですからね。それは払ってこなくちゃいけないから。そういうときは，もう無理してでも払いました。

――（W.M.）丸善とか紀伊國屋は相当残っていたんですか，一定の時期までは。

向坂　紀伊國屋のは，東京に持ち越してきたんでしょうね。そして，金文堂とか丸善も少し残してきたわね，たしかに，金文堂というのは，福岡の大きな本屋ですからね。でも両方とも，東京へ帰ってから割合に早く清算した。

紀伊國屋よ，ずっとそれからも…。だから，もう，紀伊国屋の担当の吉枝喜久保さんが心配してね。外国のこういう雑誌はどうしましょうって，私に相談なさるんだけども，私にはわかりませんから，本人が買うというのならしようがないからお願いしますって言っていたくらいでね。

――（W.F.）先生はよく，洋書目録をご覧になりながら印をつけていかれてね。注文をしておくようにって。

向坂　そうなのね，注文をしておくようにって。お金に構わずね。とにかく，いろんなものに興味がありましたからね。

向坂逸郎の蔵書

向坂　子供のころから本が好きだったんですね。冒険物語など，押川春浪などはね，あのころはもうどの子も読んだそうですからね。

――（W.F.）結局，入り口としてはそういうのが大事なんですね。だんだん本を読むのが好き，集めるのが好きという風になっていかれたのですね。

――（W.M.）「もの心ついて収集しはじめたのは，歌の本…。小学生から中学初年の頃のようである。日露戦争のあとで，軍歌の本がたくさん出た。私は本来音痴で，小学生の頃から唱歌が下手であった。しかし，大きな声で歌うことは好きであったらしい。その頃は，音楽などとしゃれた言葉は知らず。私はこの唱歌の本を集めた―」と書いておられます。

向坂　持っていましたか，そんなにね。私は身近で，かえってわからないということですかね。

――（W.M.）それから，先生がいろんなものを集めたというのは，先ほどふれた日本資本主義発達史の関係もありますが，もう一つ，決定的なのは，『資本論』に註がたくさん出てきますね。註書きにいろんな文献・作品が出てきます。それらを意識的に集められたんじゃないでしょうか。

例えば，『資本論』第１巻で，マルクスが引用しているドイツの化学者リービヒ（1803～1873年）の『化学の農業および生理学への応用』1862年，第７版ですが，その版ではありませんが，第９版，1876年を集めていますね（『向坂逸郎文庫目録　Ⅲ　外国語図書』252頁）。そして，『資本論』第１巻は，彼の『農業の理論と実際』1856年版を採りあげているのですが，向坂文庫には，この書も入っていますね（前出目録259頁）。

ですから，ダンテ，ゲーテ，シラー，ハイネ，シェークスピア，フライターク，…もあるし。先生は，これらの文献・作品など，人間にかんするあらゆる分野のことを知ることで，『資本論』をより深く理解できると考えられたのではないでしょうか。

――（H）『資本論』自体が幅広いことと，それから，先生ご自身がマルクスにやはり傾倒して，マルクス的だったんでしょうね。ですから，マルクスが好きな格言，「人間的なもので私の興味を引かないものはない」という，それが先生も好きだったということでしょうから。蔵書も，その言葉どおり，幅広くなっていったのでしょうね。

――（W.M.）マルクスが読んだものを，自分も読んでみようと思われたんじゃないでしょうかね。

――（W.F.）本質的なものが，成長過程でいろんなことと触れ合って，さらに定着していったということかしら。マルクスの註やなんかに関心が広がるというのも，もともと先生が持っていたものにぴったりくるというところがあったんじゃないんでしょうかしら。

向坂　多少あったんでしょうね。シェイクスピアなんかはそうよ。読んでいましたからね。ゲーテもそうでしょうね。

――（H）もともとの素質が，マルクスと出会って，一層，幅広くなり，しかも方向づけられたのでしょうね。それが，蔵書にも現れている…。

――（W.F.）そんな感じですね。それに，エンゲルスがとても豊かな文化人ですからね。エンゲルスの教養の深さや人柄を先生は好もしく思われて，親しみを持っておられてたようでした。

――（H）本日はどうも，ありがとうございました。